ない中立な置換である。しかし、HLAの多型を示す部位はこの法則からはずれる。その多くは進化的に有利な変異が蓄積したものであり、とりわけHLA分子の抗原提示領域と細胞内ドメインにそれが見られる（堀ら）。これらのことから、HLAの多型維持には超優性機構のような特殊な進化機構が存在することが推定できた。

# 大学評価と大学教授職に関する比較研究

大学教育研究センター　関　正夫
大学教育研究センター　有本　章
理学部　西川　恭治
医学部　瀬山　一正
総合科学部　稲田　勝彦
大学教育研究センター　金子　元久
教育学部　山﨑　博敏
大学教育研究センター　伊藤　彰浩
大学教育研究センター　相原　総一郎
大学教育研究センター　山内　乾史

## プロジェクトの概要

大学の主要な社会的機能と目される教育、研究、社会サービス等に関する自己評価が要請されている今日、その理論、現実、展望に関する研究が不可欠である。それにもかかわらず、先行研究は必ずしも十分行われているとはいえない。本プロジェクトの目的は、こうした現状に鑑み、自己評価に関する基礎的研究の一環として、「大学評価と大学教授職」の主題に焦点を合わせた観点から調査研究を実施することに主眼が置かれた。具体的には、国内外の大学教員の各種領域に対する意識や行動を、比較研究を通じて実証的に明らかにすることにある。それと併せて、研究結果を介して、本学の自己評価を考えるために若干の基礎資料を供したいと意図する点にも、目的の一つが置かれた。

調査の質問項目は、①大学教員の自己像、②労働条件、③専門職的活動、④社会サービス、⑤管理運営、⑥アカデミック・ライフの国際交流、⑦高等教育と社会、⑧大学評価、等の領域にわたって設定された。調査では、これら諸項目に対する回答を通して、内外の大学教授職が自己評価と密接にかかわる諸領域に対して、いかなる意識や行動の実態を示しているか、また今後へのいかなる展望を抱いているか、を実証的に明らかにしようと試みた。高等教育の転換期を迎えた現時点において、大学内部において自己点検・評価の実際に取り組むことになる大学教授職の現状を把握することは、今後の大学のあり方を問うためにも、大学像を模索するためにも、一つの重要な示唆を与えるに違いないはずである。

なお、質問紙は、上記の⑧の部分を除いてはすべてカーネギー教育振興財団「大学教授職国際調査」（十二カ国共同研究で日本の研究代表者は有本章）の日本語版を用いているので、最終的には国際比較の中で所期の主題を明らかにすることが期待される。

## 成果の概要

本プロジェクトによる質問紙は、一九九二（平成四）年三月に七六三四部を配布し、五月末までに三三九七部を回収した（回収率は四四・五％）。その後、回答結果の数量的、統計的処理を実施しており、現在は結果の発表に向けて作業を続けている段階である。整理ができ次第、所期の研究目的に沿った内容の具体的な検討を行うことにしている。その結果は、「高等教育研究叢書」によって発表する予定である。

本プロジェクトに関連した他の研究成果は「アメリカの研究大学と学問的生産性」（有本章著、『大学論集』第二一集）として発表された。これは、先行研究によって明らかにされている、現在の「学問中心地」の「研究大学」に焦点付けて、その学科長に対する質問紙調査の結果を報告したものである。「大学評価と大学教授職」の観点から、アメリカの研究大学が今世紀に世界の学問中心地の拠点として成長発展するに至った背景と条件を見るとき、「学問的生産性」の指標によって高く評価されている学科の制度的・組織的特性が注目される。今回の研究では、これらの学科に作用する要因としては、各種の物的要因が重要であるとしても、それ以上に大学教授職にかかわる人的要因の比重が大であることが明らかになっている。

## おわりに

本プロジェクトは、多くの方々の協力を得て進められた。研究協力を賜った大学教育研究センター内外の方々、質問紙調査に回答をいただいた方々、また貴重なご助言を賜った方々にこの場を拝借して心から謝辞を申し述べる次第である。